

# 『物語二百番歌合』の構想 ——示現する対立と補完——

山 本 美 紀

## 要旨

鎌倉時代初期、藤原定家によって創られた『物語二百番歌合』は、『源氏物語』と『狭衣物語』の物語の歌を番えた前半部の『百番歌合』と、『源氏物語』と『夜の寝覚』などの十篇の物語の歌を番えた後半部の『後百番歌合』からなる。各歌合は百番二百首からなり、それぞれに詞書と作者名が添えられている。古くよりこの歌合は、散逸物語の本文調査や、定家所持の『源氏物語』の本文を探る対象として取り扱われてきた。しかし、『物語二百番歌合』はひとつの作品であり、そこには創作者 藤原定家の意識が織りこまれている。『物語二百番歌合』の各番の詞書は、歌の背景がわかるよう物語の一部を表出しており、そのよう

にして物語の歌を番えるという手法をとって歌と物語、また歌と物語の関係を表している。そこで、本論文では『物語二百番歌合』の前半部である『百番歌合』の三つの番に着目し、歌と物語の視点から定家の制作意図の一部を探る、新たな試みである。

キーワード…歌、物語、対立、補完

## 一 はじめに

物語は歌によって起こされる。『物語二百番歌合』はそれを如実に表す作品である。

藤原定家によって創られた『物語二百番歌合』<sup>①</sup>は、物語歌を番えた最初の作品である。『物語二百番歌合』が成立

したと思われる当時、物語歌は実際の歌と同等に扱われておらず、その価値は低くみられていた。定家と同時代に生きた後鳥羽院の口伝には次のように記されている。

歌合の歌をば、いたく思ふままには詠まずと、釈阿・寂蓮などは申ししが、別のやうにてはなし。題の心をよくおもはへて、病なく、又源氏等物語の歌の心をとらず詞をとるは苦しからずと申しき。すべて物語の歌の心をは百首の歌にもとられぬ事なれども、近代はその沙汰にも及ばず。<sup>(3)</sup>

これによると、傍線部で示した通り、物語歌は詞を取つてもよいが心はとつてはならないということが通念であつたようだ。<sup>(4)</sup>

それとは対照的に、当時歌合は流行の文芸形態であつた。現存する最古の歌合である仁和元年（八八五）の『在民部卿歌合』より、歌合は隆昌と衰退を繰り返しながら発展し、平安末期から鎌倉前期にかけて最大の隆昌期となつた。<sup>(5)</sup> 九条良経が開催した建久四年（一一九三）の『六百番歌合』や、後鳥羽院主催の建仁二年（一二〇二）『千五百番歌合』などの大規模な歌合がそれを裏づけている。歌合は天皇や為政者の権力を示す材料として、広く認知されて

いたのである。

その一見対立する歌合と物語歌が『物語二百番歌合』の中でひとつになった。定家は本歌合を創ることでは何を表そうとしていたのであろうか。左記は『物語二百番歌合』の前半部である、『百番歌合』の中の三つの番である。<sup>(6)</sup>

#### 八十五番

左 ふかきやまにうつろふとてとしごろしるしおきたり  
けるふみななど御かたにたてまつるとて

あかしの入道

ひかりいでむあか月ちかくなりけりいまぞ見しよのゆめ  
がたりする

右 今大将と申、時よをおぼしすてけるよ堀川院の御ゆ  
めに

ひかりうする心ちこそせめてる月のくもがくれゆく  
ほどをしらずは

#### 八十六番

左 むらさきのうへかくれ給てつぎのとしまつりの日か  
たはらにおきたるあふひを院御らむじて、このかざ  
しよなさへわすれにけりとの給せければ

六条院中将

さもこそはよるべの水にみくさぬめけふのかざしよなさへ  
わする、

右 おさふるそでもしほるまでと侍りけるき、やとがめ  
けむ

嵯峨院皇后宮中納言典侍

心からいつもしぐれのもるやまにぬる、は人のさがとこそ  
見れ

八十七番

左 六条院すまにうつろひたまひけるころ右近将監とけ  
てみふだけづられにければ御ともにいでたつに院の  
御やまにまうでさせ給ひけるよ、たゞすの御まへ見  
やらる、ほどにむまよりおりて御むまのくちをとり  
て 源朝臣名不見

ひきつれてあふひかざし、そのかみをおもへばつらしかも  
のみづがき

右 一条のみやにてあめふる日

かしわぎのはもりの神になどて我あめもらさじとちぎらざ  
りけむ

この三つの番でまず目をひくのは歌の作者であろう。  
八十七番右の狭衣を除いて、他の作者はそれぞれの物語中  
で多く歌を詠んだ人物ではない。『百番歌合』における作  
者別の歌数は次のようになってゐる。

左『源氏物語』

光源氏	三十首
浮舟	七首
薫	六首
柏木	五首
明石の君	五首
匂宮	四首
頭中将	四首
紫の上	四首
夕霧	三首
六条御息所	三首
大君	三首
桐壺院	二首
蛸宮	二首
藤壺中宮	二首
朧月夜	二首

夕顔 二首

朱雀院 一首

冷泉院 一首

八の宮 一首

前右近将監

明石入道 一首

桐壺更衣 一首

玉鬘 一首

落葉の宮 一首

中の君 一首

雲井の雁 一首

桐壺更衣の母

藤典侍 一首

中将の君 一首

軒端の萩 一首

明石尼君 一首

空蟬 一首

右『狭衣物語』

狭衣

飛鳥井の女君

源氏の宮

女二の宮 四首

嵯峨院 一首

一条院 一首

嵯峨院皇后宮 一首

一の宮 一首

宣耀殿女御 一首

中納言典侍 一首

中務卿親王家の宰相 一首

夢歌（賀茂明神） 一首

光源氏と狭衣の歌が最も多いのは、両者の歌数が物語中でも最多のため納得される。しかし、主要人物と言われる紫の上や源氏の宮などは、それぞれの物語の中では多くの歌を詠みながら、『物語二百番歌合』で採用されたのはわずか四首ずつである。その代りに、前記で取り上げた番のような、ともすれば見落としてしまいそうな存在の小さな人物をはじめ、広く作品中より歌が採用されている。これは『物語二百番歌合』の特徴の一つととらえられるだろう。とすれば、その小ささと広さこそ『物語二百番歌合』の創作意図を解く鍵となる。

六十七首  
十七首  
四首

## 二 歌

『物語二百番歌合』は歌合作品であるため、まずは各番の歌について検討してみたい。八十五番は明石入道と堀川院（狭衣の父）の夢見の歌である。この二歌はコントラストの美しい歌である。それを初めに感じるのは、目である。歌を読むより前に、まず並記された歌を見た読み手は、それぞれの初句の「ひかりいでむ」と「ひかりうする」に着目する。そこで、この二首が対立する歌だということを自然と感じてしまう。

その後、歌を読み進めていく中で、それは確信へと変わるだろう。左歌は続いて「あか月ちかくなりにけりいまぞみしよのゆめがたりする」と表現される。「あか月」というのはじまりを連想させる歌語や、「いまぞ」、「かたりする」といった強い意志を表す詞により、読み手はこの歌に明るい印象を持つのである。

それに対し、右歌は「ひかりうする」の後「心ちこそせめてる月のくもがくれゆくほどをしらずは」と続く。「ひかりうする心ち」、「てる月のくもがくれゆく」、「しらずは」といった歌語は不安をあおり、読み手はこの歌に暗い印象を付してしまう。

また、そのように歌をイメージとしてとらえてしまう裏には、両歌に「ゆめ」という共通の背景がある。「ゆめ」という言葉は「現」に対するため、人は多くの場合、その言葉を聞いただけでとらえる対象に霧のようなはつきりしていない感覚をつけ加える。それがこの二首をイメージとして感じてしまう要因である。

次の八十六番はどちらも女房の歌である。左は光源氏の召人、右は女二の宮の侍女である。この二首に共通するのは湿り気であろう。「水」「みくさ」「しぐれ」「ぬる、」という歌語により、読み手はまずそれを感じるが、その他にも、「かざし」と「さが」という語がそれを示す。左歌の「かざし」は、ここでは「葵」であり、「葵」は「逢ふ日」と重ねて表されることが多い。また、右歌の「さが」は、「性」と「さか（そうか）」を掛けており、人が「そうか」と気づいてしまうという懸念を表している。「逢ふ日」や人が「そうか」と気づくという表現には秘密の匂いを感じる。歌を精査する中でさらにそれは実感されていく。

本番で読み手の気をひくのは作者である。女房であることはわかるが、彼女たちがどこで登場するのか、瞬時にわかる人は少ないのではあるまいか。というのも、彼女たちの歌はそれぞれの物語中でも数えるほどしかなく、また女

房であるため特定が難しい。

そんな時に立ち返るのが詞書である。左の詞書を見ると、「むらさきのうへかくれ給て」とあり、紫の上が亡くなった「つぎのとしのまつりの日」に光源氏が「このかざしよなさへわすれにけり」と言った返事に詠んだ歌であることがわかり、また、右は「おさふるそでもしほるまで」と言った狭衣の歌を聞いて詠んだ歌だとわかる。それを踏まえて歌に目を戻すと、この二首が誰かを咎める歌であることに気づくのだ。この場合の誰かは、左は光源氏であり、右は狭衣である。女性が歌を介して男性を咎める。それは自ずと「恋」という言葉が脳裏にうかぶ構造である。そこへ前述の歌語が合わさることによって、この二首に色めかしい湿り気を感じさせるのである。

次の八十七番は、歌合中でも特に目をひく作品である。それは、狭衣が作歌した右歌に番えられているのが名を記されていない源氏の従者だからである。詞書により光源氏の須磨下向に従った従者であることはわかるが、彼が特別な物語の登場人物というわけではない。「そんな彼の歌はどんな歌なのか。」読み手の興味がまずそこに向かうのは必然であろう。

そうして歌に目を向けてみると、「かも」、「はもりの神」

という語に関連する「あふひ」、「みずがき」、「かしわざ」という語が印象的であり、そこから読み手はまず両歌に目に見えない存在を感じるようになる。

さらに、歌意を考えてみると、左は「おもえばつらし」という表現や「むまよりおりて御むまのくちをとりて」との詞書から、神のつれなさに対する恨みを抱いていることが理解される。右は「我あめもらさじとちぎらざりけむ」と、神に約束しなかったことを悔恨していることが把握される。「神」を共通項とし、守られなかった左歌と、誓わなかった右歌は、異なる感情で読み手に迫ってくるのだ。

『百首歌合』の八十五・八十六・八十七の各番は、それぞれの語や語から抱くイメージにより、時には相反し、時には添加し合いながら存在している。これだけでも十分に思惟的であり、楽しむことができる。しかし、読者の興味はここで終わらない。歌を解した後、読み手が抱く感情は「この歌の前後の場面はどのようなものであったのだろうか。」ということであり、実はそこから読まれなかった文脈が開かれていく。

## 三 物語

『物語二百番歌合』において物語へ還る最初の契機となるのは、詞書である。しかし、詞書で示されるのはごく一部であり、歌を解する情報とはなっても物語そのものを表すことはない。より深く歌の詠まれた物語の内容を知るためには、『源氏物語』と『狭衣物語』の両物語に視点を移すことが必要となる。

まず、八十五番の歌である。左は『源氏物語』若菜上の巻にある。明石入道が「ふかきやま」に「うつろふ」ため、「ふみ」を「御かた（明石の君）」に贈る場面である。

思ひ離るる世のとぢめに、文書きて、御方に奉れたまへり。（中略）仮名文見たまふる目の暇いりて、念仏も懈怠するやうに益なうてなむ、御消息も奉らぬを、<sup>A</sup>伝に承れば、若君は東宮に参り給ひて、男宮生まれ給へる由をなむ、深く喜び申し侍る。（中略）わが御許、生れ給はむとせしその年の二月のその夜の夢にみしやう、みづから須弥のやまを右の手に捧げたり。山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす。みづからは、山の下の方にかくれて、その光にあ

たらず、山をば広き海に浮かべておきて、小さき船に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。朝より、数ならぬ身に頼むところ出で来ながら、何ごとにつけてか、さるいかめしきことをば待ち出でむと心の中に思ひはべしを、そのころより孕まれたまひしこなた、俗の方を見はべしにも、また内教の心を尋ぬる中にも、夢を信ずべきこと多くはべしかば、（中略）<sup>A</sup>若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、はたし申いたまへ。<sup>A</sup>さらに何ごとをかは疑ひはべらむ。<sup>B</sup>このひとつの思ひ、近き世にかなひはべりぬれば、遥かに西の方、十萬億の国隔てたる九品の上の望み疑ひなくなりはべりぬれば、今は、ただ、迎うる蓮を待ちはべるほど、その夕まで、水草清き山の末にて勤めはべらむとてなむまかり入りぬる。

ひかり出でん曉ちかくなりにけり今ぞ見し世の夢がたりするとして、月日書きたり。（『源氏物語』〈若菜上巻〉一一二―一一五頁<sup>8</sup>）

右は狭衣が「よをおぼしすて」ようとした「よ」に「堀川院」がみた夢の歌である。『狭衣物語』巻四の冒頭に登場するが、補足のためここでは巻三の末尾より引用する。

・・・C 立ち出でたまふ心地、疎かならず、背き果てぬべかんめる心のほどかなと、我ながらありがたく思ひ知らるるに、涙のみぞ、なほ心弱くこぼれける。

涙のみ淀まぬ川と流れつつ別るる道の行きもやられぬ何心なく恨みたまへる面影は、この世の外になりぬとも、身を離るる折あるまじく、なほ引き返さるる心地したまふ。

「光失する心地こそせめ照る月の雲かくれ行くほどを知らずはDさるは珍しき宿世もありて思ふこともなくもありなんものを。とくこそ尋ねぬ。昨日の琴の音あはれなりしかば、かくも告げ知らするなり」とて、日の装束うるはしうして、いとやんごとなきあしきたる人の言ふと見たまひて、うち驚きたまへる殿の御心地、夢現とも思し分かれず。いかなるかたざまぞと思ひ続けたまうに、ただ大将の御事ぞと心得たまふに、物もおぼえたまはず、おそはれたまへるけしきのいみじきを、上もいかなる御事ぞと思し騒ぐにも、とみにえぞ聞こえたまはぬ。〔狭衣物語〕へ巻三〇四〇二〇二―二〇七頁<sup>9)</sup>

このように、物語にまで視点を拡大すると、歌合で感じ

ていた左右の歌の印象が反転する。左は「ひかりいでむ」歌でありながら、傍線部Bにあるように入道の入山を告げる歌であり、右は傍線部Cで出家を決意しているように「ひかりうする」歌でありながら、傍線部Dで示したように、狭衣の即位を感じさせる歌となる。

であるが、物語はさらにここから開かれる。『源氏物語』はこの後、傍線部Aに記された男官が帝となり、歌の「ひかりいでむ」という言葉を表す事態が生じていき、一方の『狭衣物語』は、狭衣は帝となるも思い人の源氏の宮とは結ばれず、女二の宮からも冷たくあしらわれる運命を嘆いており、結果「ひかりうする」状態になっていく。しかしこれは、物語を読み進めなければわからないことである。歌から得た印象が、物語に回帰すると覆され、さらに読み進めるともとの印象へと戻る。歌と物語の間の繰り返しは、印象の繰り返しともなるのだ。

続いて八十六番左は『源氏物語』幻の巻の歌である。詞書からも紫の上の亡くなった次の年の祭の日に詠まれた歌であることがわかる。

祭の日、いとつれづれにて、「今日は物見るとて、人々心地よげならむかし」とて、御社のありさまなど思し



やる。「女房などいかにさうざうしからむ。里に忍び出でて見よかし」などのたまふ。中条の君の東面にうたた寝したるを、歩みおはして見たまへば、いとささやかにをかしきさまして起き上がりたつ。つらつきはなやかに、にはひたる顔をもえ隠して、すこしふくだみたる髪のかかりなど、いとをかしかり。紅の黄ばみたる気添ひたる袴、萱草色の単衣、いと濃き鈍色に黒きなど、うるはしからず重なりて、裳、唐衣も脱ぎすべしたりけるを、とかくひき掛けなどするに、かたはらに置きたりけるをとりたまひて、

<sup>E</sup>「いかにとかや、この名こそ忘れにけり」とのたまへば、さもこそはよるべの水に水草あめ今日のかざしよ名さへ忘れるる

<sup>F</sup>と恥ぢらひて聞こゆ。げに、いとほしくて、

おほかたは思ひうてし世なれどもあふひはなほやつみをかすべきなど、<sup>G</sup>一人ばかりは思し放たぬ気色なり。〔源氏物語〕△幻卷Ⅴ 五三七〜五三八頁

右は『狭衣物語』卷二、女二の宮を思つて涙を流す狭衣に中納言典侍が贈る歌である。

かたみに苦しき御心地どもに、げにいかに思さるら

ん。さしもあえかに心苦しかりし御ありさまに、こちらの月ごろわづらひたまひて臥したまへるありさま思ひやらるるに、やがてこの御簾の中にも這ひ入りぬべう、ゆかしうあはれにおぼえたまへば、<sup>I</sup>「小野の篠原」と心にもあらず言われて涙ぐみたまへるけしき、言ひしらずなつかしうてあはれにめでたきを、大空もげに思ふ心をば見知るにや、にはかに曇りてうちしぐるるに、木枯もあらあらしう吹きまよひて、色々の紅葉も散りまがひつづいたう濡れたまへれば、乱れたる扇の隠れもなきをさし隠して、

<sup>H</sup>人知れずおさふる袖もしばるまでしぐれとともにふる涙かな聞き分くべうもなく独りごちたまふを、中納言典侍の耳癖に、

心からいつも時雨のもる山に濡るるは人のさがとこそ聞けと言ふを、出雲の乳母少し近く居よりて聞くに、耳とまりけり。〔狭衣物語〕△卷二Ⅴ 二一四〜二一六頁

傍線部で示した通り、前後の物語に目を向けると彼女たちの立場の違いからであるうか、歌合で感じていた歌とは異なる感覚を覚える。咎めるといふ行為に違いはないのだから、左は歌に自らの気持ち託したものであり、右は狭衣

の気持ちに対する感想を歌で表している。それは本文を読んで初めて認識することであらう。

また、注目すべきは詞書にも引用された本文の一部である。左の詞書には「このかざしよなさへわすれにけり」と示されているが、実際の物語本文にはそのような表現はなく、光源氏は傍線部Eのように、「いかにとかや、この名こそ忘れにけり」と言っている。これが作為であるのか否かは慎重に考えるべきであるが、それを置いて、これによつて読み手は「あふひ」「かざし」「名」「忘れる」「いかに」という表現に無意識の内に関心をよせる。そうすると本文中、傍線部Fの「恥ぢらひて聞こゆ」という表現が美しく響き、光源氏を控えめに愛する女房の姿が映し出され、それに対峙するのは傍線部G、光源氏の「一人ばかりは思し放たぬ気色なり」である。紫の上を亡くした悲しみのなぐさめに、女房の気持ちを頼る光源氏。それは逆に女房のせつなさを際立たせている。

それに対して右は「おさふるそでもしほるまで」と物語中の傍線部H、「人知れずおさふる袖もしほるまでしぐれとともにふる涙かな」をそのまま引用しており、歌がポイントであることが想像できよう。それに応えるかのように、本文には傍線部Iの「小野の篠原」とさらなる歌の引用が示されている。この歌は『古今和歌集』の「浅茅生の

小野の篠原忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに」と推測され、自らの恋心をわかつてくれない恋人に対する切ない思いを詠んだものである。狭衣も同じように、女二の宮からは敬遠され、なかなか思いが届かないでいた。ここでは、そのように「袖もしほるまで」泣いたり、「人知るらめや」と嘆く狭衣の思いが重なつて表現されており、それを聞いた中納言典侍が「人のさがとこそ見れ」と、少し嫌味を込めた歌を詠んだのも納得できる。

歌から物語へと還った時、見えてくるのは頼りない男君たちであり、女房の強さやしなやかさである。開かれた物語によつて、咎めるといふ行為はより具体性を持ち、歌に新たな読みが付与される。

八十七番、左は『源氏物語』須磨の巻の歌で、朧月夜との密事が露見した光源氏が須磨へ出立する前に父の稜へ赴く場面である。前述したように、歌合の歌は名もない右近将監のものであり、彼の歌は『源氏物語』中に二首しかない。

月待出でて出でたまふ。御共にただ五六人ばかり、下人も睦ましきかぎりして、御馬にてぞおはする。さらなることなれど、ありし世も御歩きに異なり、みない

と悲しう思ふ。」中に、かの御禊の日仮の御隨身にて仕うまつりし右近將監の藏人、得べきかうぶりもほど過ぎつるを、つひに御簡削られ、官もとられてはしたなければ、御供に参る中なり、賀茂の下の御社をかれと見たすほど、ふと思ひ出でられて下りて御馬の口を取る。

ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂のみづがきと言ふを、げにいかにも思ふらむ、人よりけに華やかなりしものを、と思すも心苦し。君も御馬よい下りたまひて、御社の方拝みたまふ。神に罷申ししたまふ。

うき世をば今ぞ別るるとどまらむ名をばただすの神にかませてとのたまふさまも、しものめでする若き人にて、身にしてみてあはれにめでたしと見たてまつる。

〔源氏物語〕<sup>△</sup>須磨卷<sup>▽</sup> 一八〇～一八一頁

右は『狭衣物語』卷三の歌で、詞書にあるように、「一条のみや」で女二の宮との子供と居る折の狭衣の作である。

六月十日、いと暑き昼つ方、一条の宮にて、若宮具したてまつりて、端つ方に涼みたまふに、にはかにかき

曇り、村雨のおどろおどろしきに、柏木の下風涼しく吹き入れたれば、御簾少し上げて見出だしたまふ。中に、柏木げにいたう漏りわずらふ。

柏木の葉守の神になどて我雨漏らさじと誓はざりけん雨風につけても、<sup>K</sup>悔しきことがちなる眺めには、若宮を見たてまつるたびごとに、さておはせましかばと思さえぬ折はなかりつるを、いとどこのほどはかけぬひまなく、あはれに悔しき御心の中、いと暑かはしげなり。前裁ども、雨に心地よげに思ひたる中に、<sup>M</sup>大和撫子のいたう濡れて傾きたるを折らせたまひて、嵯峨院へ参らせたまふ。

恋わびて涙に濡るるふるさとの草葉にまじる大和撫子とあるを、御覽ぜさすれど、例のかひあらんやは。

〔狭衣物語〕<sup>△</sup>卷三<sup>▽</sup> 九一～九二頁

物語に目を移すと、先ほどの歌の相違についての解釈が一層はつきりする。「神」を共通項とし、守られなかった左歌と誓わなかった右歌は、異なる感情で読み手に迫ってくると先に述べたが、その守られなかったことと、誓わなかったことがはつきりとしてくるのだ。左は傍線部Jで示したように、権勢を極めた当時を振り返りそれを懐かしんでいるのに対し、右は傍線部Kのように、自分のもとから

離れていった女性を偲んでいる。

さらにこの二つの歌の決定的な違いは、一方が主人を思う従者の義の歌であり、一方は女性を思う男性の恋の歌であるということである。それは「ますらおぶり」な歌と「たおやめぶり」な歌とも解されないだろうか。右近将監は自身の詠歌の後、歌を詠んだ光源氏を見て傍線部Lで示したように、「あはれにめでたし」と感じている。対する狭衣は、大和撫子に目を移してそこから若宮を想起し、それをきっかけとして女二の宮へ傍線部Mのように「恋ひわびて・・・」の歌を贈るのだ。歌から物語を開いてみると、八十七番の二首は同じ「神」に対する歌でありながら全くと言っていいほど異なる印象を持たせ、歌で感じていた差異はより強調される。

歌から物語へと還った時『物語二百番歌合』の歌の世界は大きく変化する。歌の解釈を反対にする場合もあれば、追補する場合もある。『物語二百番歌合』というひとつの作品でありながら、そこだけではとどまらず、典拠となった物語へと還ることをうながし、さらにそこから『物語二百番歌合』の世界を拡げる。読み手が歌から物語へ還り、そこから再び歌へ還ることを許可してやると言わんばかりの作為性である。それに我々は嵌められ、歌に興味を持ち、

物語へ還ろうとする。そうすることにより、歌に一層の感動がもたらされ、加えてその歌の存する物語を面白いものだと感じる。歌と物語が同時にあり、お互いを補い合いながら存在する。しかしそれは同時に、お互いが価値を奪い合うものでもある。歌が面白いのか、物語が面白いのか。それこそが『物語二百番歌合』の持つ最大の魅力であり、対立と補完の関係が同時に存在するものが物語と歌なのである。『物語二百番歌合』はそう示唆している。

#### 四 おわりに

対立と補完は決してはなれることがない。『物語二百番歌合』が成立したと推測される頃、和歌の創作は飽和状態に陥っていた。歌の価値が認知され、多くの歌人や和歌作品が制作されるも、『古今和歌集』時代を超えるような歌や歌人は現れず、技巧に走る傾向があった。それに異を唱えたのが俊成・定家親子である。俊成は『古今和歌集』を超えるべき対象としてではなく、参酌する「古の典<sup>いしえ</sup>」としてとらえることで超えようとした。また物語歌についても、『六百番歌合』において「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也<sup>⑬</sup>」と『源氏物語』を擁護する有名な判詞を残し、歌と物語を篤く用いようとしていた。それを受け継いだ定家は、

さらにそれを高みへと導こうとしたのではないだろうか。物語と歌は隔てるべきものではなく、ともにあるべきものだ。

冒頭であげた『百番歌合』の作家数一覧に、ここでもう一度目を向けてみよう。ここからは作者の歌数を知ることができる。しかし、実際の歌や物語は何ひとつ見えてこない。歌は歌ではなく数えられた物と化し、そうなれば物語は一層見えてこない。それはすでに歌と物語を隔ててしまっていることに他ならないのだ。

番うこと、それは物語と歌がともにあり、対立と補完を繰り返しながら開展している様をまず表すのである。対立と補完は相補的なものであり、その対立と補完によって成り立っているのが『物語二百番歌合』なのである。還るべきは歌であり、物語なのだ。定家はそれの人々にも伝えなかった。であるから当時流行していた歌合という文芸形態によって、当時価値の低かった物語歌を番えたのではないだろうか。定家に迷いはなかった。むしろ彼には確信があった。

建久七年（一一九六）、定家は次のような歌を詠んでいる。

いつしかといづる朝日をみかさ山けふより春の峰の松風<sup>13</sup>

物語と和歌を愛した定家は、朝日を待っていた。対立と補完によって成り立っている『物語二百番歌合』という春風に乗せて、定家は今にそれを伝えていくのだ。

注

① 田淵句美子『「物語二百番歌合」の成立と構造』（『国語と国文学』二〇〇六年五月）

② 『物語二百番歌合』は定家自筆本の奥書から、藤原良経の依頼によって制作されたと考えられ、それにより良経の没する元久三年（一二〇六）以前の成立であると推測されている。

③ 「後鳥羽院御口伝」「日本古典文学大系」一四四頁

④ これについては、松村雄二「源氏物語歌と源氏取り——俊成「源氏見ざる歌よみは遣恨の事」前後——」「源氏物語研究集成一四」風間書院 二〇〇一年、渡辺康明「源氏物語と新古今和歌」「古典文学論叢一六」二〇〇五年、寺島恒世「新古今時代の源氏物語受容」「国語と国文学」二〇一一年などの諸氏が指摘し、論究されている。

⑤ 萩谷朴編『平安朝歌合大成一〇』同朋舎 一九七九年に詳しい。

⑥ 『物語二百番歌合』の本文は、定家自筆本（久曾神昇「物語二百番歌合と研究」竹本元暉・久曾神昇 未刊国文資料刊行会 一九五五年所収）による。

(7) 『百番歌合』の作者のうち、光源氏と狭衣のみ初出の後  
は名を記されない。

(8) 『源氏物語』の本文は全て『新編日本古典文学全集』に  
よる。

(9) 『狭衣物語』の本文は全て『新編日本古典文学全集』に  
よる。

(10) 『物語二百番歌合』の制作に際して使用された物語の本文  
については、井伊春樹(『物語二〇〇番歌合の本文―  
定家所持本源氏物語の性格―』『大阪大学国文学研究室  
語文四八』昭和六二年)などが論考を発表されており、  
「純正青表紙本」を依拠したとされている。しかし、『明  
月記』によると建久年間に定家は『源氏物語』の盗難に  
あつており、さらに『物語二百番歌合』の奥書では宣陽  
門院所持本を用いたとも記されている。それとは別に、  
詞書と本文の違いは他の番にも存在し、定家の意図とも  
考えられる。詞書と現存本文との差異はさまざまな可能  
性が考えられるため、慎重に検討する必要がある。

(11) 『古今和歌集』巻第十一 恋一、読み人知らず『新編日本  
古典文学全集』

(12) 『六百番歌合』冬上 一三番『新日本古典文学大系』  
一八七頁

(13) 『韻歌百廿八首和歌拾遺愚草』〔訳注藤原定家全歌集〕  
河合出書房 久保田淳訳

(やまもと・みき、本学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程)